

# 定信紀行／白河かるた 札でつながる今・昔

## 定信紀行

第十一話 谷文晁のこと

寄稿 市文化財保護審議会委員

佐川 庄司

谷文晁は、江戸時代後期に江戸下谷（東京都台東区）の画塾写山樓で渡辺華山をはじめ立原杏所、椿椿山、高久靄厓など多くの画人を育成した。江戸絵画の巨匠の一人である。

当時、江戸で「この頃のはやりもの、画師は文晁、詩は五山、料理八百善（きんぱろう）」という小唄が流行した。また、文晁は諸大名などからの絵の注文に追われるほどであったという。松平定信はこのように文晁が名を成したのは自分（の庇護によるものだと『花月日記』）の中で吐露している。

文晁は天明8年（1788）に定信の生家・田安家の家臣となり、寛政4年（1792）には老中（在任中の定信付の絵師）となつた。そして、寛政年間に2度ほど定信に随伴し白河を訪れており、小峰城三之丸に「小峰山房」「小峰東堂」というアトリエを構え、多くの作品を描いている。

以下の写真は、寛政6年10月に小峰山房において定信作庭による三郭四園のうち完成直後の南園を描いた「樂翁公白河御下屋敷真景図」である。

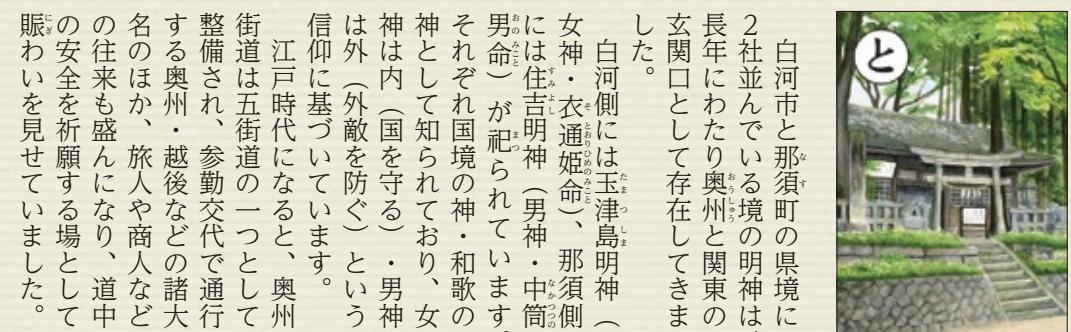


▶白河市歴史民俗資料館蔵

問観光課 ☎(28)5526

西洋的遠近法を駆使し、那須連山の麓に広がる南園の景観を俯瞰的に描いた水墨画作品。図の左上には「甲寅冬十月写于小峰山房 文晁」と記されている。

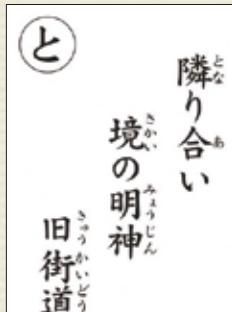
また、文晁は白河藩絵師である大野文泉・星野文良・久松南湖、画僧白雲、蒲生羅漢などに画法を指導し、白河における江戸絵画史をけん引した。そして「日本美術史の始まり」とされる古文化財図録集『集古十種』の編纂をはじめとする定信のさまざまな文化事業を支える中核の絵師としても活躍した。



札でつながる今・昔

十一枚目

「境の明神」



白河市と那須町の県境に2社並んでいる境の明神は、長年にわたり奥州と関東の玄関口として存在してきました。白河側には玉津島明神（女神・衣通姫命）、那須側には住吉明神（男神・中筒男命）が祀られています。それぞれ国境の神・和歌の神として知られており、女神は内（国を守る）・男神は外（外敵を防ぐ）という信仰に基づいています。

江戸時代になると、奥州街道は五街道の一つとして整備され、参勤交代で通行する奥州・越後などの諸大名のほか、旅人や商人などの往来も盛んになり、道中の安全を祈願する場として賑わいを見せていきました。

奥の細道の旅路を見守つた2柱の神は、歴史の変遷の中で静かに鎮座しています。古から連續と続く物語を今に伝える、歴史の足跡がここにあります。

問まちづくり推進課 ☎(28)5533